第５章　明治時代以降

ここでは、時系列に確認してみましょう。

明治２（１８６９）年　鹿籠郷・久志秋目郷・坊泊郷と合併して南方（みなみかた）郷となる

鹿籠郷のうち、東部一帯は新たに別府村とし、別府村を除いて南方郷となりました。また、明治５年には、郡制（県内に７つの郡）が実施され、南方郷は指宿郡に編入されました。

さらに、明治12年には、南方郷のうち、久志秋目郷と坊泊郷が分離して、南方郷は鹿籠村となりました。

９（１８７６）年　鹿籠浦人、口ノ島・臥蛇島（海区借用に関する嘆願書を送り容れられる。

10（１８７７）年　西南戦争。鹿籠勢、出陣４０５人、戦死１２５人。鹿児島の涙橋での激戦に参加しています。

下写真は南方神社にある招魂碑）

明治14（1881）年　鹿籠村を東鹿籠村、西鹿籠村、枕崎村の3村に分け、戸長を置く。

ここで初めて「枕崎」という地名が、正式な1つの行政区域の「枕崎村」として出てきます。

明治17年には、「岩起こしの風」と呼ばれる台風がありました。全体の倒壊家屋は2万5400戸、枕崎だけでも650戸にのぼりました。

22（1889）年　市制、町村制施行。別府村・東鹿籠村・西鹿籠村・枕崎村合併して、東南方村となる。村長、児玉久清。役場は、現桜山小東南隅。

前年の明治21年の人口は、1万8747人です。

ここで今の枕崎市の原型ができますが、明治時代になってからの行政区域は、20年間めまぐるしく変わっています。新しい国づくりの慌ただしさが伺えます。

新しい自治制度を確立するために、大規模な町村合併が行われ、従来の5分の1になっています。人口2万5000人以上を市とし、県では鹿児島市が誕生（全国では39の市）しました。

明治25（1892）年　鹿児島―知覧―枕崎間の県道開通

28（1895）年　枕崎郵便局電信業務開始

黒島流れ　遭難漁船23、死者411人の大惨事　7／24）

鹿児島―伊作―加世田―枕崎間の県道開通

黒島流れの前年の明治27年には、暴風のため、西南方村の漁船4艘と枕崎の漁船2艘が遭難し、合わせて130数人が死亡しています。

黒島流れは、黒島付近を通過した台風のため、カツオ漁船が遭難、枕崎の漁船、沈没23隻、溺死者411名、坊泊でも沈没11隻、死者165名、川辺郡全体では713名の死者を出した一大惨事でした。この台風は、鹿児島での最大風速が12・6m、下関の30・7mが最大で、豆台風でした。

黒島には避難港がなく、断崖絶壁のため、容易に船を接岸できませんでした。

経済的にも厳しくなり、遺族救済のため始められたのが、かつお節バラ売り行商」でした。大願寺住職の兼広師の働きも大きく、お寺の組織網を使って、行商を助けました。

右写真は、411人のうち99人の犠牲者を出した小湊地区の石碑です。

なお、この頃の大島島司であった笹森儀助は、その著　拾島状況録」に、硫黄島より枕崎へ硫黄運輸船、年間、おおよそ、一五回の行通　交通のこと）あり」と述べています。漁業だけではない、この海域での活発な交流が行われていたことがわかります。

明治32（1899）年　南薩漁業組合設立

34（1901）年　鹿児島―川辺―枕崎間の県道開通

明治36年1月には、村長児玉久清が在職中に亡くなっています。鳥羽伏見の戦いに従軍し、錦絵（左写真）にもなっています。明治5年には戸長です。西南戦争に参加し、刑に服しましたが、明治14年刑期満了とともに帰郷し、再び枕崎村の戸長となっていました。3代村長の今給黎誠吾　明治43・3～昭和21・11まで37年間在職）は、児玉の長男でしたので、明治・大正・昭和20年頃と長期に亘って、この親子が枕崎のリーダーだったことになります。

明治38年には、黒島流れに次ぐ、海難事故が発生しました。遭難船は11隻、死者は264人でした。うち、枕崎の遭難船は3隻で、77名の死亡者でした。船は帆船です。

同39年には、カツオ船に落雷があり、気絶者が多く出て、内４名が死亡しました。
同42年には、帆船２艘が硫黄島近海で遭難し、46名が溺死しています。

明治42（１９０９）年　枕崎漁業組合設立

今給黎友衛、立神に焼酎工場を建設する（写真）。

鹿児島―指宿―石垣―枕崎―坊泊間の県道開通

この県道の最大の難関は、花渡橋の建設でした。花渡川の河口は広く、干潟は長く、その幅は４００ｍにも及びました。枕崎側の干潟は盛り土をして両側を石垣で積み上げ、橋の長さを60間（１２ｍ）としました。幅は２間３尺（約４．５ｍ）でした。橋は橋脚から木造で、地元の用材が多く使われました。

なお、この橋ができる前は、俗に「くわんじん橋」と呼ばれた簡単な板橋が架けられていましたが、私的なものだったので、通行料として１人３厘が必要でした。

43（１９１０）年　枕崎養豚組合設立

塩田（製塩業）廃止となる。

塩田は、すでに１６６３年には花渡川河口沿岸にはありました。）

養豚については、園田兵助を中心に品種改良　イギリスからバークシャー種の輸入）に努め、明治末には、養豚戸数約１８００戸、年末飼頭数２０００頭、年内生産頭数５０００頭に達しています。大正期には全国にも名を知られるようになりました。大正２年には台湾に種豚10頭（写真）を、翌年からは沖縄、朝鮮、満州方面にも年間数10頭の種豚を輸出しました。

養豚の飼料には、鰹節製造過程に出る内臓なども利用しました。

なお、日本初の有限責任東南方村養豚購買組合の設立は、明治35年です。

明治期の枕崎における畜産の中心は馬です。荷物の運搬や肥料（馬の糞尿）として貴重でした。明治41年における専業農家は２２０８戸で、馬の飼育頭数は１７７７頭です。農家の80％が飼育していたことになります。

ちなみに、同年の牛の飼育頭数は１５２頭、豚は１５１３頭です。

明治44年には、９／21の台風で、全壊家屋１８２戸、死者３名、船舶破損55隻の被害です。